

特別養護老人ホーム「杜の里」の報告の3回目である。被災後の孤立した状況の中で、他地域の施設に避難するのではなく、平常勤務に戻るまでそこに踏み留まる道を選んだ。それが利用者の命を守る最大の方法である、と。そして言葉通り、1人の死者も出すことなく乗り越えた。

山崎和彦理事長は、夜間ではなかったことを理由の1つとして挙げた。夜勤者は、各階2名ずつで計6名。この数では何もできなかっただろうという。それでもう1つ、職員研修の成果であることを強調した。ここまで、スタッフによる記録を紹介してきたが、職員1人ひとりの判断の迅速さが書き留められていた。そして施設長による被災状況の把握の素早さと、それにもとづく全体への指示が明快だったこと。明快だったがゆえに「利用者全員の命を守る」という目標がすべてのスタッフに共有され、行動が迷いのないものとなっていることも、読みとることができた。

筆者はこれらに加え、スタッフ全員が自らも被災者であるなか、このような緊急時の介護がなされたという事実も改めて書

「老いること」と「死ぬこと」の尊厳に向き合うために 83

津波被災のために 孤立した介護施設が、 なぜ1人の死者も出さなかったのか

社会福祉法人 杜の里福祉会(仙台市若林区)理事長・山崎和彦氏への取材より——その3

■ 佐藤 幹夫

き留めておきたい。たとえば副施設長の報告書には、支援物資の食料は固い物が多くて利用者がそのまま食するのは危険であったため、通常の何倍もの手間をかけて柔らかくしたという記載がある。それでも《その際も立て続けに、「こちらでむせました」「こちらで誤嚥しました」という声が上がリ、その都度看護師が駆けつけて吸引を行った》という。まさに予断を許さない食事介護であり、それが介護者にどれほど緊張を強いるものか、想像に難くない。

自身の家族の安否確認もままならない中で、食事、保温、ストレスや恐怖心の緩和といったような、普段の何倍もの心配りを必要とする介護が行われていたのである。スタッフ同士でも鼓舞し合い、統率のとれたチームワークとして現われたことは、一朝一夕の、付け焼刃の鍛錬で身につくようなものではないだろうと思う。

山崎理事長は言う。

「杜の里は、厚生労働省が指定するユニットケアの実地研修施設として、多いときは年間100名もの研修生を受け入れてきました。研修生は1週間の研修期間中、施設のユニットにずっといて杜の里の介護職員の動きを見えています。ユニットケアはどうすれば良いのか研修生が自分自身で考えるこ

とが研修の目的です。つまり私の施設の職員は、自分たちがやっていることが評価の対象となるわけです。これが足りないとい指摘され、どうして自分たちにはできないのか、何が足りないのかを考えながら指摘されたことをありがたく受けとめて、これは改善、これも改善と、この10年やってきました。便臭のないおむつ交換はどうすればできるか、みんな考えてほしい。いち早く便臭が消えるような、介護をしているのが気づかないようなおむつ交換をするにはどうするか。そうやって、自発的に勉強会を積み重ねてきました。こうした地道な取り組みの積



津波による浸水被害を受け、水が引いた後の施設内。パニック状態になっても不思議ではないなか「利用者全員の命を守る」との思いで全職員が避難対応にあたった。

み重ねで自主的に物事を考える職員が多くなったこと、それから避難訓練を毎月行っていたこと、この2つによって被害を最小限に抑えることができたのだと思います」

山崎理事長が施設経営に対する明快な理念を持っていることは、取材のこここで窺うことができた。しかし理事長や法人の基本的な方針が、スタッフに共有されていなければ掛け声倒れになる。山崎理事長は、スタッフ1人ひとりの意識改革を徹底して図りたかったこと、企業経営では当たり前の考えが介護福祉ではなかなか通用せず、そうしたあり方を変えたかったことを述べ、自分たちは東北の仙台からよりよい施設介護のあり方を発信したかったと強調した。

特別養護老人ホームは1960年代前半から70年代にかけて、全国に量産されることになるが、多くが病院の建物施設をモデルとしながら作られてきた。なかには、人生の最期を過ごすにはまったくふさわしくない生活を強いる場所となった施設もあった。「日本の戦後を復興させてくれた先輩たちが、自分の望まない最期を強いられ、そして死んでいく。これではだめだろう、という思いが私には非常に強かった。まず建物から変えていこう。建物の住居環境を『ブ

ライベート』『セミブライベート』『パブリック』『セミパブリック』に分散させて、普通の住宅で生活できるような施設に作りかえる。そして、自宅で生活していたリズムそのまま、施設で暮らせるような生活環境に変える必要がある。やがてこの考え方は『ユニットケア』と呼ばれるようになりましたが、1人ひとりが大事にされるような、自分らしく最期まで過ごせるような、そんな介護をしよう。1人2部屋のスペースを作り、夫婦の片方が入所したときにはもう片方が一緒に泊まったり、自宅に帰ったりしながら一緒に過ごし、人生を見つめる環境がいまの日本の老人介護施設には必要だろうと思ったのです。」

大船渡「富美岡荘」から仙台「杜の里」へ

そして話題は、山崎理事長の原体験である大船渡時代の話になった。

「大船渡にいたとき、私の母親（富美岡荘）創設者・山崎シゲ氏）はいつも24時間体制でした。ベッドに電話があつて、夜の8時になると、夜勤者から必ず利用者全員の報告を受けていました。当時の職員は訓練期間が半年もありません。せいぜい1週間か2週間程度勉強をして現場に出ていましたから、

いくら専門学校で学んでいても厳しい。夜間の報告は母親にとつては、職員の教育も兼ねていたわけです。たとえば熱があります、という報告があったとする。すると何度ですか、顔色はどうですか、と母親は必ず尋ねる。携帯電話なんかはなかったですから、夜勤者は、ちよつと待つて下さいと走つて行つて顔色を見て、特に悪くはないですと答える。すると次は、汗はかいていましたかと聞く。また走つて行つて確かめる。こういう繰り返しの中で、若い職員も、私も育てられました」

大船渡の小高い丘に、「富美岡荘」と命名された老人ホームが開設されたのは、1976年だった。施設長だったシゲ氏は、夫で医師の伊一郎氏との二人三脚を続けてきたが、その歩みは『富美岡荘物語 すべては愛から始まった』（佐藤真一監修）という一著にまとめられている。高齢者施設は「娯楽山と言われていた」というが、70年代の東北地方における介護施設における偏見がどれほどのものかは、同じ東北の出身である筆者にも覚えがある。伊一郎氏とシゲ氏はそのような中で先駆者であり、著書を読すると、あの時代、すでに高い理念をもって高齢者のケアにあたっておられていて、筆者には大きな驚きだった。書中に次のよ

うな印象深い一節がある。

シゲ氏は「特別養護老人ホームのケアは、長期的なターミナルケア」であり、「ターミナルケアには2つの考え方があり」という。どういうことか。「そのひとつは、医師より余命が数カ月と判定され、看護や医療的なケアが求められる時期です。これは短期的、あるいは狭義のターミナルケアです。もう1つの考え方は、私たちがお年寄りとかかわりをもつたとき、出あつたときから始まっているという長期的なターミナルケアです」と述べている。つまりは老人ホームでのケアは、毎日が「一期一会」の思いをこめたものでなければならぬ、ということになる。筆者は、深く納得をした。（シゲ氏は現在も現役の園長として活躍しておられる）

今回の震災で大船渡の施設は津波被災を免れたが、1人でも多くの市民を助けなければならぬと、法人が総力を挙げて避難施設としての役割に努めたという。

「今回、体育館とか公民館とか、いろいろな場所が避難場所になりました。私は、大船渡の施設で避難者を受け入れていましたが、被災していない老人ホームが、避難所としては一番いいと痛感しました。看護師がいる、介護員がいる、組織としてまとまっている。医者も常駐させることができる。施設全体

がバリアフリーになっているし、障害をもっている人に対するスタッフの意識も高から、福祉避難所としても機能できる。これからの介護施設に関しては、このことも、国や自治体は考えてほしいと思います」

そして次のことも加えた。

「今回、大船渡全体が真つ暗になりました。私の施設は高台にあるので、投光機4台をリースし、施設を照らすように、と言つて照らしました。真つ暗な中、丘の上の老人ホームが明るくなつていたということで、市民の人たちの心の支えになつたと言います。やはり光は理屈抜きで人間を奮い立たせますから」

加えてケアそれ自体について、もっと客観的データにもとづいたものにできないか、とも山崎理事長は考えていた。

「例えば食事の介護。昔は◎、○、△、×とチェックするようになっていました。その記録が1カ月分たまるわけですが、たまるだけで何の役にも立っていない。そこで私は10人の介護員を集めて食べ残したご飯を見せ、これは何割を食べたと見る？ 全量か、ほぼ全量か、半分か、10分のいくつかと聞きました。同じように、副食や水分補給量はどうか。

厚生省が定めた1日の摂取カロリーは3

食で1500カロリー程度ですが、10分の7しか食べていない日が1週間続けば、3割は食べていないということになるから、当然、体重は減っていきます。ところが漫然と記録しているだけでは体重が落ちていることに気づかないことがあるし、病気が重篤化しているということもままある。それを防ぐために、私の施設では食べた量をすべてデータ管理しています」

排泄も同様だった。いつ交換したのか、記録がなければ分からない。定時交換ではなく随時交換だとがんばっていた施設長が勤務していたときは職員も努めていたが、転勤などでその施設長が不在になると、やがて記録が空白になる。3日以上排泄がない人は何人いるか。データ管理をしていれば、すぐに出てくる。記録がなければ、100人も利用者がいる施設では、介護職員の連携が悪いだけで、1週間便が出なくても見落とされてしまうことがある。これでは良質のケアとは言えない。

「水分補給にあっても、補給データが下がると熱が上がる。データがなければ、やはり気づかれないままになってしまう。きちっとした管理をし、水分をきっちり取ることと熱は出なくなる。あるいは歯磨きをしつかりやると、肺炎は少なくなる。そうやって

介護力をつける。それが私たちの仕事ではないですか。そんなふうなパーソナルケアを提唱しながら、もう一方では空間構成をユニット型にまとめ、自分らしい生活ができる環境をつくろうとしてきたのです」

「杜の里」の再建をどう果たすか

ところが、被害状況が明らかになるにつれて、「杜の里」には難問が立ちあがっていた。来ないと思っていた所に津波が来た。そうであれば安全な土地に移転しなければなら

ない。土地は確保できるのか。移転となれば多額の資金が必要となる。新しい土地に移転するとしても、つなぎの期間、それまでの場所に仮設施設として過ごすのか避難するのか、という問題もあった。

大きな余震が続いている。4月7日の深夜には最大余震が発生し、津波警報が発令された。同11日には福島県で震度6弱の地震が発生し、やはり津波警報が出され、その直後も余震が繰り返された。5月の連休には大きな余震が来る、といった噂もあった。携帯電話の余震を告げる警告音は、6月までのあいだ、1日に10回以上も鳴り続いていた。ここに留まって、次の津波で死者を出すことになったらどうなるか。責任問題どころではなかった。

「私が『杜の里』に戻ったのは1週間経ってからですが、玄関前の瓦礫の山を見たときには涙が流れて止まりませんでした。しかし2階に上がってくるとき、どれだけを借金してでも、新しい施設を作る、80代の皆さんのラストステージを津波で終わらせるわけにはいかない。そう決意しました。なにがあってもいい施設に入っていたら、極楽浄土に行っていたら。そうしないと私の責任は果たせない。絶対に施設を再建する。スタッフ皆を集めてそう言ったのです。全



取材時点(2011年11月)の「杜の里」の1階。一見すると、完全に復旧しているように見えるが、海水によるダメージは随所に及んでいる。そのため、現在は津波によるダメージが少ない2階に事務所を移し、通常業務を行っている。

員でこぶしを上げて『復興するぞ!』と3回、氣勢を挙げました。それから厚労省に行き、国費をもって沿岸全域の施設を再建してほしい。そう陳情しました」

山崎理事長は厚労省、仙台市を陳情して回った際、被災施設への厚意溢れる支援のスタンスを感じ、深い感謝を覚えたという。

また、職員の前では見せなかったが、ここに留まるかどうか、最後まで悩み続けたという。なかには東日本大震災クラスの津波の再来の可能性を指摘する専門家もいる。

「私らは被災した施設に、再建まで籠城することになっていますが、私には全員の命を守る責任がある。職員に私は、もし2階に進出するような津波が来たときには私が全責任を負う。そう伝えました」

そして、今回は全国の老人施設の関連団体からいかに助けられたか、と次のように言う。

「全国の施設を回って頭を下げっぱなしにしないといけないくらい、今回、われわれは支援してもらいました。今まで私はオナーの立場で仕事をしてきて、皆の世話をするのが役割だと思っていたけど、こんなにお世話してもらい、どうやってこれから返せばいいんだろうと思うくらいです」

そして、事務局長をはじめ、職員の何人かはまだ自主的に施設に泊っているといい、

幹部職員への感謝を口にし、最後に次のようなエピソードを話してくれた。大船渡以来の法人の基本理念が、震災のあと戻ってみると、いつの間にか1つ増えていたというのである。

「私の法人の基本理念は、まず、

1 広く愛すること

大船渡の施設は、先見の明があったなんて言われるけど、そんなものではありません。すべては愛から始まった、これです。だから、これが1番目です。そして、

1 礼をもって老者に仕えること

1 広く万人のために活動すること

1 健康を大切にすること

1 生涯学ぶこと

ここまでが、開設当時から毎朝唱和され



山崎理事長は、「必ず再建しますよ」と何度も力強く語った。

てきた基本理念だったのです。ところが、震災後、これにもう1つ、加わっていた。

1 すべての人を救うこと

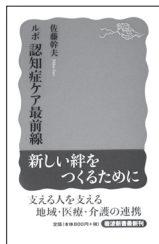
いつの間に、これが入ったんだ?と聞いたんだけど、皆、笑っている。私の気がつかないうちに、法人の理念が1つ増えていた。その通りだから、文句は言いませんでした。そして、必ず再建しますよ、と山崎理事長は最後にもう一度くり返した。

『ルポ 認知症ケア最前線』

●佐藤幹夫 著

●岩波新書

●定価840円(税込み)



超高齢社会に足を踏み入れた日本は認知症患者の増加に今後どう対応していくべきか。本書は「地域連携」「ケアする人へのケア」といったキーワードを実践に現している現場の取り組み事例を紹介し、「認知症ケアのこれから」と「21世紀における新たな社会連帯の形」を提示する。

■さとう・みきお フリージャーナリスト

養護学校教員を経て2001年からフリージャーナリストに転身。著書に『閉居裁判』(朝日文庫)、『裁かれた罪、裁かれなかったこと』(17歳の自閉症裁判)(岩波現代文庫)、『自閉症の子もまた生きてきたこと』(洋泉社)、『ルポ 高齢者医療・地域で支えるために』(岩波新書)など。近著に本連載が基となった『人はなぜひとをケアするのか』(岩波書店)。共著は「刑法三九条は削除せよ! 是か非か」、『少年犯罪厳罰化 払はこう考える』(いずれも洋泉社新書)など。